

機関誌回顧〔第1回〕

『人と国土』 1975.7-1977.11

一般財団法人国土計画協会専務理事 太田 秀也

はじめに：本稿の趣旨

国土計画協会では、設立の1946年11月の約5年後の1951年4月に、機関誌『国土』を創刊し、その後、1958年6月から『季刊国土』、1975年7月から『人と国土』（国土庁広報誌）、2001年7月からは『人と国土21』とタイトル・発行形体を変えながらも、国土計画・地方計画等に関する行政・民間等の取組みや論考などの情報発信を行ってきました。本号で、72年を経過し、発刊も459号となったところで、2025年には『人と国土』創刊から50年を迎えるところです（各号の記事の目次は、当協会HPの国土政策ライブラリーに掲載しています。<https://www.kok.or.jp/library/>）。

これまで掲載してきた記事には、（必ずしも学術的な研究論文ではないが）現在読み返してみても、示唆に富み、今の時代にも通じると思われる内容のものも多く、現在の国土行政・地域行政や、民間主体の国づくり・まちづくり活動などにも参考になるものが多く含まれています。また、記事に含まれるエピソード・アネクドット（逸話）なども（国土計画等と直接関係のないものも含め）興味を引くものがあります。

そこで、そのような記事を取り上げて、参考となるような内容を要約・抜粋して、情報提供することが役立つのではないかと考え、当協会機関誌の回顧シリーズとして、今号以降お届けしたいと思います（記事の抽出、要約・抜粋は、筆者の主観によるものであることとお断りしておきます）。

まず、時代も比較的に近い1975年以降の『人と国土』を対象とします。

（なお、記事は、主に国土計画・地方計画、地域振興関係のものを対象とします（土地・国土利用・水資源・防災等関係のものは原則対象としません）。また、紙面制約もあり、限られた記事の掲載しかできず、（今後継続する場合も）各号において掲載の対象とする発刊年も決まりがなくなる点、紙面構成の都合により不定期の掲載となる点、加えて当時の記事（肩書も当時のもの）のまま掲載し（現時点での可否を含め）内容の確認は行っていない点をご了解お願いいたします）。

『人と国土』 1975.7-1977.11の回顧

1. 概観

『人と国土』は、国土政策、国土行政の基本は「人間と国土のかかわり合い」を展望し、人間と自然との調和のとれたうまいのある豊かな生活環境を創造することにある」という主旨で命名された（次頁の創刊号「編集後記」参照）。

『人と国土』では、各号において特集を組んでいるが、そのほかにも様々なカテゴリーの記事が掲載されている（次頁の創刊号の目次参照）。

特集の内容としては、1975.7創刊号は「国土利用白書特集」、次いで1975.11月号「過疎問題」、1976.1月号「長期展望（西暦2000年）」、同5月号「農村問題」、同9月号「人間居住問題」、1977.1月号「首都問題」、同3月号「地方都市問題」、同5月号「海洋利用問題」、と続いている（他に、水資源・防災関係・（別の）国土利用関係の特集もあるが、今後記載しない）。

また、国土庁の報告書など重要な公表資料の（全文）掲載も行っており、臨時増刊号（1975.12月、1976.3月、1977.8月）で「国土計画の基礎資料集（1・2・3）」を発行するほか、1976.1月号で「長期展望（西暦二〇〇〇年）作業参考資料（要旨）」、1976.5月号で「農村整備のビジョンをもとめて」（農村整備問題懇談会中間報告（要旨））、1977.3月号で「21世紀の人と国土」、1977.11月号で「第三次全国総合開発計画」等を掲載している。

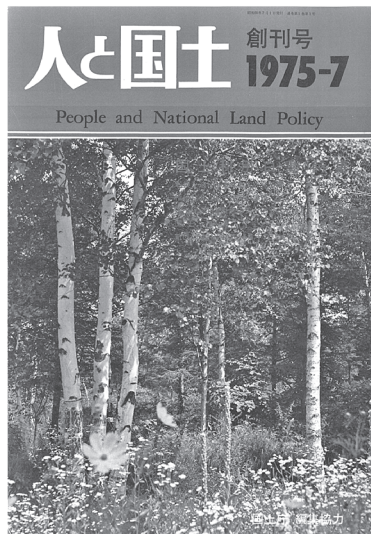
○国土計画関係の記事

1977.11月号では、第三次全国総合開発計画（1977年11月）の全文を掲載している。なお、三全総策定前の時期であるが、三全総に関連する記事はあまり見受けられない。

○その他の記事

各界の専門家をはじめ、広範囲の分野の記事が多い。三全総策定前後の時期で、国土庁発足以来続けられ、三全総策定作業を深みあるものとするを期待して行われていた「100人講演会」（下記の宮本氏、山崎氏、木村氏、川添氏等も講演者に含まれる）との関連があったことがうかがえる。

<1975.7創刊号表紙>



<1975.7創刊号編集後記>

編集後記

▼国土庁が発足してちょうど一年になる。初仕事は狂乱的ともいえるべき地価騰貴を抑えること。全庁を挙げてこの問題にとり組んできた。一連の施策は本文で詳述のとおり、戦後はじめての地価下落となつて実を結んだ。とどまるどころを知らない地価の上昇にタメ息をつき、マイホームの入手に絶望的とまでになりかけていた国民にとって、まだまだ高木の花とはいえ、久し振りの朗報であることに間違いはない。この間「寄り合い世帯」といわれる国土庁の内部体制も、むしろ寄り合いのメリットを十分発揮しながら、すっかり固つたと見受けられる。二年目はいよいよ国土利用計画や第三次全国総合開発計画を策定し、過密・過疎問題にメスを入れ、水資源利用の長期計画を定めるなど国土行政の基本を確立する年。更めて国土庁の真価が問われ、国土庁の腰を据えた働らきが一段と期待されるべきを迎えた。

このような時に、国土庁の編集協力によって、雑誌「人と国土」創刊の運びとなった意味は大きいと思う。編集者一同、全力投球したが、さてその出来はえはどうだろうか。反省し、改善すべき点も少なくないようだ。読者のご叱正をたまわりながら、読者とともにつくる雑誌として、号を重ねるほどに一層の内容充実を図っていききたい。

▼雑誌の題名を決めるということは、やさしいようで意外とむづかしい。「国土政策」、「くどく」、「LAND」、「あすの国土」——といろいろの案があった。最終的には「人と国土」ということになったが、そこには、これからの国土政策、国土行政の基本は一言にいうて「人間と国土のかかわり合い」を展望し、人間と自然との調和のとれたうおいのある豊かな生活環境を創造することにある。そのためには国民各層のさまざまな意見を汲み上げた上での国民的コンセンサスの形成が欠かせない。この雑誌がそのための情報提供、意見交換の場として少しでもお役に立てればとの願いがこめられている。

<1975.7創刊号目次>

海外レポート 記者クラブ 海洋法会議に出席して 麻布の花・スタジオ「四一」 「寄り合い世帯」の功罪 兼元忠英 竹林達男	特別インタビュー 初代国土庁長官・西村英一氏を訪ねる 衆議院議員 西村英一・インタビュー 入江徳郎 地域特性を生かすことをめざして 公衆道徳と土地問題 盛岡市長 工藤 巖	想うこと 生きていく 自然と人間 都道府県 だより	新しい地域社会をつくる青年のまごころ 宮本常一 茨城県 地域開発をめぐって 開発計画課長 鈴木友之介 岐阜県 総合計画について 企画調整課長 大平 充夫 鳥取県 計量経済モデルについて 企画部 参事 細野 光弘 長崎県 新しい長崎の未来を求めて 企画理事 松田 光生	青い空 アルプスと城のまち 松本 よみがえる 故郷 国土庁資料 国土統計 国土庁日誌 編集後記・デスク・メモ	132 126 130 120 65 67 117 116 114 113 102 92 94 73 71 109
---	--	---------------------------------------	--	--	--

座談会 国土利用白書の特集 昭和四十九年度・国土の利用に関する年次報告(要旨) 国土利用白書の解説 国土利用白書への論評 「合理的」な国土計画のすすめ 不合理に思える日本の国土政策 地価規制が主か宅地供給が主か 大石 泰彦 G・ヒルシャイ 華山 謙	国土利用白書を読んで 司会 川越 昭 麻生良方 柳田光男 小宮隆太郎 河野正三	エスプリ 転換を迫られる日本人の意識構造 福田社会と国土政策の課題 国土総合開発計画の策定に当って 国土と交通 八十島義之助	創刊によせて カントリー・ジェントルマン 転換を迫られる日本人の意識構造 福田社会と国土政策の課題 国土総合開発計画の策定に当って 国土と交通 八十島義之助	人と国土 創刊号目次 一九七五年 国土庁長官 金丸 信 国土庁事務次官 橋口 収	8 10 12 19 25 31 36 59 75 80
--	--	---	--	--	---

2. 主な記事

○下河辺淳（国土庁計画・調整局長）「国土総合開発計画の策定に当って」（1975.7）

策定段階の第三次全国総合開発計画の策定の意義、策定作業の内容（巨大都市問題の総点検等）、取り巻く状況（定住人口や国土利用の動向）を述べた上で、むすびとして、「従来のような高度成長を前提とすることは困難であり、『静かで控えめな安定成長』を前提として、改めて国土総合開発の基本的方向づけを考えてみる必要がある」、（GNP成長率3%と8%の場合の国土との関係と比較した上で）「経済計画と国土計画の調整は大きな課題である」とするとともに、「これまでの開発計画の中で見失なわれがちであった文化の問題がある」、「安定した国土利用によって、安定した生活環境を確保することは、国土総合開発計画の窮極の目標である」と述べている。

○會田雄次（京都大学教授）「転換を迫られる日本人の意識構造」（1975.7）

「かつては少なくとも、東京は政治の中心、京都は文化の中心、大阪は経済の中心というように機能が分散していた。」「藩にかなりの自立性があったために極端な中央志向に陥らずにすんだのである。この藩の自立性を担保したのは、それぞれの藩がそれ相応の知識人、技術者、商人を内にかかえもっていたというインテリジェンスの地方分散現象にほかならない。」「ところが明治になって近代化が進行する過程にあってあらゆる知識層が東京に集中した。故に、今いうところの中央志向型…国民一般の意識がすべて一様に中央に向くようになったのは明治以後の特異な現象である。それがどうにもならぬようになったのが戦後である。」

○宮本常一（武蔵野美大教授）「新しい地域社会をつくる青年のまごころ」（1975.7）

冒頭で述べられているように、「中央包括的な計量的発想による国土開発政策の中で不当にも忘れ去られている地域社会の構造的基盤に目をむけ、新たな意味を担った地域共同体の再構築をよびかける」ものである。そのため、「生活基盤である山や川や森林を自主的に共同で管理すること」の重要性（洪水で道路が崩ればツルハシかついで補修作業に繰り出す習わし）や、補助金制度の悪弊（「大変な災害ですね」と語りかけると「いや、大変な幸いです」（補助金で仕事ができたと）といった事例）をあげ、「地方が企画し経営の主体性を持ち、その利潤が再生産にもまわされるような地域社会形成への指向」を説いている。

（宮島の松枯れを見た学者が「枯れたら枯れたでいいではないか」と発言した理由—もともと松の木の島でなく雑木の島であったのだから雑木に戻す—の記述も、歴史を知る重要性を示すものとして興味深い。）

○川添登（建築評論家）「都市の文化—その歴史的考察」（1975.9）

「ヨーロッパの現代都市、とくに大都市は、バロックの時代に原型がつくられ、現在もその遺産を受け継いでいる。…この時代になると、芸術の分野までも宮廷が支配するようになった。」「日本における都市文化の形成は、西欧の場合とは、著しく異なっていた。…上層階級は都市の創造的文化の担い手にはなりえず、士農工商の枠外にあった河原者による歌舞伎や廓などが、都市文化のセンターとしての役割をはたした」「日本の都市文化は、より庶民的であり、チマタ的であって、大衆文化社会的な性格を本来からもっていた」「そしてこの伝統は、文化は民間のすべきことで、行政のかかわることではない、といった通念を生み、現在まで生き残っている。」

○山崎正和（関西大学教授）「日本人と空間意識—その国土観の基礎—」（1975.11）

「国土開発を立案する場合にも」、日本人の「心理的な伝統になるべく逆らわぬように考える必要がある」とした上で、「日本人の数珠玉に似た空間意識というものを考慮に入れば、ブラジリアのような一元的な都市設計がわが国にふさわしくない」、「新宿のような混沌を残しながら、あちこちの町角に落ち着ける小さな空間を数多く作る」と述べ、「日本人の強い中央志向というものを理解すれば、単純な地方分散（decentralization）は決してうまくいかない」、「ドイツやイタリアのような地方都市を頭において、画一的に地方都市を育てようとしても徒労に終る」、「むしろ、地方に数少ない中心地をいくつか作り、多中心的（multicentral）な分散を行うことが国情に合っている」と説いている。

（「山を眺めて安心する国民性」（江戸時代前のみやこは全て盆地にあった）、「道の文化」（旅の途中の地名を詠み込んだ“道行き”、地下街と百貨店が好きな国民）などの記述も興味を惹かれる。）

○木村尚三郎（東京大学助教授）「東西文化の比較—その国土観のちがいが—」（1976.1）

ヨーロッパでは、「本来的に都市は大きくしないという原則がある」、その背景として、「都市は農村のサービスセンターとしての役割を持ち、（防衛的な要求により）「サービスセンターである都市は、できるだけ小さくてしかもガッチリ固められ、都市と農村の区別がはっきりとしてい

る」、「都市を小さくということは、これからわれわれが都市設計を考える場合、大事なことだと思われる」と述べている。また、「地方志向型の中央集権」として、「フランスでの中央集権は、人々の気持がそれぞれ住んでいる地方に向いている地方志向型のため、中央のエリート官僚が全体をコントロールし、国の統一を保たなければならないという意味のものである」、「日本の場合は…むしろ、地方が中央の方に積極的に目を向けている」とされている。あわせて、「ヨーロッパでは、昔の領主が土地の自由売買を認め」なかったといわれるが、「土地の自由売買を認めると、その農村に住んでいない、無関係の市民が財産として土地を買い放置しておくかも知れない。放置すれば雑草が繁って地域の人たちに迷惑をかけることになる」という実情があったと記述されている。（「対立的自然観と融和的自然観」として「自然を支配し、飼いなすことが『文化』であるというヨーロッパ独特の対立的自然観」、「ヨーロッパでは、人の手が入れば入るほど自然は美しくなるといわれる」、「日本人は優しい自然の中に身を委ねているので、手を加えるということに対して非常に違和感をもつ」という記述も興味を引く。）

○〔対談〕加藤秀俊（学習院大学教授）・小松左京（作家）「知識と情報の国土計画的分散」（1977.3）

「ぼくは大阪を動かなかった…大阪でも構わないという決心をしたのは電話が自動即時になったこと、飛行機の国内線ジェット化の兆しがあったことと昭和三十九年に新幹線の開通と名神・東名が出来るといった情報が入ったからです」（小松）、「人口分散というときに、あんまり個別的分散は考えない方がいい…日本の国土全体に、算術平均的にパラパラと人間を配置して…そういうのは分散でも何でもないので、実際には、ある程度の密度効果というものが無いことには、生活は成り立たない」（加藤）、「ネアンデルタールの居住地の密度を計算すると、香港のスラムと同じくらい…つまり、昔は人口が少なくて周りが広がったから、みんな伸び伸び暮らしていたかということ、そうじゃないんですよ。かなりの密度で暮らしていないと、お互いのセキュリティ（安全）も保てないし、大体おもしろくない…だから国土的に言ったら…地方中核都市とか、各県庁所在地とか、そういう拠点がやっぱり大事」（加藤）。
（「十何年前になりますけれど、私が京都にいますとき、川端先生誘致計画というのを立てた…川端さんから取れる所得税というのは、変な町工場を三つ四つ作るよりも多い…公害は全くない」（加藤）、「この前ある地理学者の話を聞いたんですけども…東日本の都市集落の発達というのは流域型…西日本は海岸型」（加藤）という記述も興味を引く。）

○〔対談〕伊東俊太郎（東京大学助教授）・坂本賢三（神戸商船大学教授）「風土と科学—人間にとって科学とは何だったのか—」（1977.7）

「科学技術というものも、その風土に適応した使い方というのがあるんであって、外来思想で全部割り切って、それをブルドーザーのように広げればいいということにはならない…日本の風土の特徴等を十分考慮して、もっといろんな選択を考えなきゃいけない…この問題と関連して、日本人の自然との付き合い方の面白い例として、日本の霊長類学を挙げたい…今西錦司さんを始めそのグループがやっているように、森の中に人間が入っていくわけですよ。猿を檻に入れて研究するんじゃない」（伊東）、「ここ数年、環境問題というのが叫ばれているけれども、『環境』という日本ではすぐ『自然』ということになっちゃう。…環境というのは何も自然だけじゃない。都市も環境であるし、そこでつくられた建物とか、都市のプランとかの総てが環境なんですね。それがいつも落ちている。」（坂本）。

（「ヨーロッパには『神聖な森』という概念がない…だから森をばさばさ伐っちゃって、いわば自然を裸にってしまう…この世界というものを『脱魔術化する』（伊東）、「ペーコンがいった、神によって人間に与えられている『自然の支配権』…その言葉を文字通り適用して、ヨーロッパに始まった科学というものは、自然支配の路線というものを設定した」（伊東）といった記述も興味深い。）

○〔対談〕岡本太郎（洋画）・川添登（建築評論）「文化の空洞化時代に生きる」（1977.9）

「元来、日本の自然というのは、ヨーロッパの自然から比べると圧倒的に生産力が高いのです。…北欧の人が…日本庭園なんか見ると非常に人工的だ、ノルウェーやスウェーデンでは自然を自然そのままにしておくというのですね。しかし、日本の庭園は、ほっていたらすぐペンペン草が生えてしまう。絶えず雑草を取ったり人の手が加わらないと、日本の自然の美しさというには保存できない。その辺が分かってもらえないところなのだ。」（川添）、「時代が降って水田農耕が始まる。すると自然と人間の関係は前の時代のものとは非常に様変わりしたものになった。これは水利にしる、田園のつくり方にしろ、非常に人工的に自然に手を加えなければ出来ないうすからね。」（岡本）

（「文化と文明は正反対だと僕は思うんだ。文化というのは、むしろ逆に原始時代にあったもので、文化を失ったのが文明社会だと思うね」（岡本）、「ヨーロッパには一つの構築された観念的な世界がある。おかしいことが出てくれば、それがどんなに便利なものでも、抵抗が働いて生活なら生活の秩序を維持しようという気持ちが起こるんです。日本にはそういう体系がないんだ」（川添）といった記述も興味深い。）